



初巻
浮世草子

浮世草子

初巻

3118
4



へ13 特
3118
4

かぶき

九

春の



馬馬

うん



村田

柳髮新話浮世床初編卷之下

江戸戯作者 式亭三馬戯編



城とたぬき動極へび
 けびをまらけり
 廊へ這入るぬ人を通人といふ女弁買をして今をけりあ老の
 むそれ速うれえ体を滅とらる。野暮ごととてさうだが
 悟つてえれかそんまりのふ。短く遠く一角を敷竟あ
 やがのまへ渡り。ト川柳島舟のるがうそあ後へ通この
 通り者どのといわれずてえ体を消さよりのも。野暮と

内へ届けたらぬ一寸あかしくと天鼓羅や又福解を買食
とるう。かゝる奴ぢやア後へいりのおもあへり亦入をせうと
しつ移へくく「ア」のころけり「まのふ子」も若人茶をせと
缺く「はらま」茶の食うけを「中」の「ナ」のまゝ
天窓あてあへる番の控助が「あ」市や移らぐ移を借と
食らぢやア後へくもまのふの道を借候はれ「く」わら
ゆんが「ま」ア「ア」のちもあかしくこのもあかしくの
あけくもて移を「あ」赤わゝる。「それ」わらぐら
あんとのふくう「い」浪を「あ」赤わきてわらけ「い」の調

あせわやアがれ「も」志移入とをぬじて「ヤ」へ「由」
なまゝ仕りるを「う」エ「ア」イ「り」ヤ「せ」なれん「う」の「い」
織ふゆあうらう「う」商人の巻舌でむうど職人のあま
がうらうら。ヤイ「あ」おさるう「い」ゆるの「あ」おさる罪
あかへ「あ」舟盤を「あ」く「あ」舟盤「あ」舟盤「あ」候ま「あ」
「あ」わらめそれ始の「あ」ま「あ」切「あ」ら「あ」あ「あ」
五十日やぢあうらうが天窓が痛く移らうら「あ」れねく「あ」ら
「あ」のハま「あ」さんの周と「あ」ん「あ」の「あ」ら「あ」教「あ」る「あ」ら「あ」打「あ」方

たんご二の腹をさしきつたひきかきあつちりあるめ入其
 一の腹をさかやア一の腹とらあがめるん九九さうひ
 そのひよ。あらア二の腹で入天窓が痛うらえ一まであつち
 あつちあつちなまるめ入とあつちあつちの「昨日そらと内へ倚
 かまんよはま一たら。そんな痛めあつちあつちあつちせ
 と内へ逃とあつちあつち。あつちあつちあつちあつちあつち
 移へら。今度教アトぬうととあつちあつち内へ逃往くはひの
 してあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

吾人をも悪くとは情入るん「ナア二あつちあつちあつちあつち
 能かき入とあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 りねあつちあつちの樽焼や「トアアアアアアアアアアアアアア
 用をきつるんあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 ヤイ愛よなる中らあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 皆天窓をつつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

甘茶を嘗させようとおれさまが好むぞ。あやまんころ
 「中は」の「ナ」中まの口の減入奴等どナ」を
 あれ何よあつらう商人よる巻きでもうと職人よるま
 てう。パイ手おるをとりう。今并盤をたくろ二の戻り九九とえ
 ころ。べらめ命が續うど内へ逃してぬれ。ヤイ。えんてわろ
 笛のあつらも天窓の今在者れるらじの世即めゆあその
 流を早く留せトヨイ トはまをまをまをワイ
 網市ごのう慌ゆげ。轉々場さんのほもを用する人が

悪い「な」主人を撰むろが。人もちまろ人よる撰め
 秘へと才上のあつらねの一人の才体の能くははのろ
 ちまろ人よる速う「ゆる」も運次身よ智恵も秘へ
 人今を持と大勢の人出あめまねてわる「こ」ううと
 「な」が井ももよ「ゆる」如在秘へと「ゆる」人が一生
 多まろと終るのがあは「短」そこが世の中ど。カもゆる「短」仕
 秘へと「内」よ万能よ達「ゆる」一公のほもね奴が「ゆる」のこ
 「その」が仕方秘へ物よ一生涯うろくま「ゆる」きあるら

方ぐお尻が居る。どめさても寝も居候。どめりまうらう。
 半年う小半年わの内め愛相づし。又他へり。又一通も
 るねが珍しくあつて。這入。よりのまよ居び。わねて。又居ひ
 「そのませさうの子奴を物倦のまらりのよ」全体倍速の
 うらまが居る。移入のま。あつても万能。達。こら。ひま。わの
 近。しつを。茶臼。蘇。で。一種も。本業。まら。移入。障子。を
 張るの。腰張。を。ま。の。屏風。を。移入。の。と。ま。ても。積。の。人。ま。似
 と。移。に。ぬ。毛。の。三。本。不。足。ま。ふ。が。あ。つ。と。ま。ら。の。耐。り。

お後。ふま。ま。ご。ろ。ヤ。料理。を。仕。ひ。と。ら。あ。つ。が。半。半。ま。で。本。式。が
 出。ま。と。出。ま。と。は。が。陰。梅。が。悪。の。から。も。海。が。悪。の。ま。で。ヤ。ヤ
 と。ら。行。あ。も。の。移。入。其。耐。ま。ん。ご。ら。不。出。ま。ご。と。ま。つ。て。も。世。の
 づ。ら。暴。て。や。れ。の。南。人。の。居。の。ま。あ。つ。て。中。と。は。く。程。を。癡。呆
 だ。う。の。ま。の。の。ま。実。と。ま。つ。て。居。ぐ。ひ。お。ま。の。ま。と。サ。ン。ゴ。ウ。ガ
 出。ま。と。ら。あ。つ。が。手。紙。一。通。も。人。並。ら。出。ま。の。移。入。其。ま。せ。巴。が
 手。紙。の。ま。に。社。の。心。ら。ま。で。社。の。あ。つ。の。の。物。ま。あ。成
 して。の。ま。の。ま。ら。あ。つ。の。ま。ら。一。休。ら。ぬ。が。牙。を。ま。あ。わ。入

ちの奴ごうらけ根がまうら魂が迷つてわるい急な程の
 るがあつらうと驚きぬのよ。そと世同体のま流ふらせを
 て何はく出ても一本ばうひふなはとらあ男ぶひまもいご
 内遣入のうとてとと大とらま。スハとらあ舟の一向後ま
 ぞ。それどもほと大恩のむとまの内ふあれが居移入でん大と
 どり万奉おれ獨る家固をうりまらてかろる物ふあねあ
 おれ移入のうとてとと大まき売とぬじて世の中
 あれめくいのさあめの家らとらあ者の愛る者ごまにじ

わる家のふらせとに地所の固まて働くいのさあまに
 が飯をりうて食居る固てあも汲と居膳が居て外の
 内へあまけお行くと水を汲ぐまうり飯を林うり。頼も
 せぬ使ふ行り外は仕人のめももを好でつまへく已
 はうり何でもお春とて普用てよく用のまのほく思
 りせと一寸四百の附借や又つし本のなら附居るはまのし
 痛ふこのめ附泊あてお化をかせぐのかしちうし
 移中あまふむがしこの全盛を云出して不同格のまを

ひげじその「長竹あしのち質しつのき者ものも居の漆と公のさりく成
短のこ「短居の根ね付と中ちゆうと一体たい別べつるのよ一居の大だい首しゆ
形の餅を食ひト、よくまつの「長河が原はらと海山うみの物
を居のこの居のを接子せきかんのう「短またたふおからり
のじが居の「短イヤ居のでおひきぬの。おらうか親ちやぢ父ちちかお入い達たち
の知ち居のを海り洞りのけいらうら中居のが一えし移いせ
勿論り中ちゆうのおれた者ものもあるらんと居のよおらうやの者ものが
ら大だい侍しやくのららんとおひし移い入い「居のおれた者ものが一えし移い入い」

下ノ事ニ

ある有あるの海うみの恩をらんぬりのよ先おらうらの恩を先
からおれを中ちゆうがまいのれる也なりと並りのでか移い入い居の亦またもい
の道みち理りと是非ひ接せをうけらあよ「短ライく驚おどろをさしてさらの
さとと。銚しやう子しもまん亦のお助すけがまこ一あんおナアの首くびのつらい
居のがまあこ一あのの年で痛心こころ候をうけるさらうのの
大酒しゆ食じきひの湯ゆれが大だい飯いひ食じきひとまうよ一と拍子しやくし搦ならうこ
ラットだまららうくトのおれた者ものが一えし移い入い居の亦またもい
と「短ラットめあはしらうくイヤアらがねも板い持も持もらうア

「居ぬおつりめ人の役割」ホニヨも偏りヤア後ノイ警る
「暇ふかりてむしえ服せうぜぬまうとせれト痒の」なぐ
「逆よ」めれがきでよ「らまうらま」めれがらるる「雄子猫」
「らう猫」といふ此猫をえきり「懐」よく「寐」てぬせ「ライ
「えん」ト「業」晒ぬけに「し」て「し」で「居」ぬぬ
「め」ま「ご」め「ま」ご「け」を「ま」す「も」渡「世」の「も」母「さ」る「り」の「い」
「ら」が「い」ま「ご」ら「の」の「家」の「海」山「入」る「も」の「ら」ヤ
「移」る「め」れ「で」入「家」業「の」る「で」通「る」これ「や」と「有」る「い」江戸

めく渡世の事なぬ奴の本ららば「い」ま「ご」の「い」の「共」
「ま」れ「も」田「舎」入「ぬ」涉「没」を「さ」る「中」の「そ」れ「の」力「の」
「ま」流「中」を「通」る「り」の「旅」歩「の」せ「と」ト「江戸」小「店」居「て」古「文」を「さ」る
「わ」さ「そこ」が「お」江戸「の」め「の」が「い」ま「ご」ト「い」ま「ご」
「お」し「う」「と」ら「い」「整」る「ゆ」の「地」震「の」知「居」る「う」「何」地「震」取「つ
「寐」ち「ヤ」た「ら」る「い」「の」地「震」を「ま」る「後」人「と」い「め」の「後」
「樂」の「イ」マ「後」し「楽」とい「ふ」が「お」ら「う」恋「の」心「を」睡「て」し「せ」入「り」ぬ
「今」定「入」る「ら」け「ナ」ニ「今」す「ま」この「積」け「り」る「朝

下ノ三十五

の肉づから居の経承人も。宵誠の法を拵らるるは。
おらが因へする今更の日月今更も稻妻今更もらねどもちや
とるさどりの事お出さひく。そのせ著が流いとまをわら
かんぎとて今持ふるまをじらするのを食て一生
終るが徳さ。之が金持の根性か分よ。おらが隣れを福を
を人移入年中あてけきして食々のも食らぶ今更を
ためて一生金浪の番をら抱られと抱るの。めんあふ溜
とぶが死福が金持く物。その跡をの實子もなり。他

そろり作るの。ごはまら移入利屋の一人の。びびり
いふ今持ふと大氣さりの移入なせとまてんあけ入幸抱
あてためと今更他人は唯作るの。ごうら星もど大氣さるけの。ある
りく。あつちど其花さりの。ハテ運がいとどつては好る
かやあつてあつち。あつちの因あつての伯母さまの死今更
千五百あ女房の里。紀念分の地面が二つ。おとれも活券が
ふあごの八百あごの。ら物。ごうら大息らやアめるあつち。紋者
の給金をを續むやうにせ。おらも能伯母さまが欲し

のごよ「^短啼ららせ」^短修くめね弘法さぬがむほしき人
 とこのころ「^短空を移入のさ」今母は「^短まうづらう」^短「おめ入の
 奥うらまきこえるざらう」^短「小窓の恋入首と出ると隣の因ま
 由よこええる」^短今お配らせ「^短このおりし」^短「そのさまよ
 うありおとやうよ」^短「^短変助の令侍あつた悪らうな受ての活ご
 ぞれど先せんの女房とらめめせうらうの苦く勞らうしたりのよ」^短「^短さうさらうと
 苦く勞らうが止るとあつた今夜の女を連れてすむく先妻をば「^短二人で
 しびりおとせ」^短「^短このさうふめのかきさる今とどし「^短おんや

かさづうとお里に居いさうづう。今平のくの一ちんで「^短あらう
 づうひ付さうとくくめち物ふるう」^短「^短あむめさう仏て
 し「^短そのやあひがかくはとさう。おらアアてもかうさうと
 「^短さうのかアめを死しんで死殺されるめま。又また変助も行末
 かうくちヤア移入のさ人惜おかけさうと「^短さうと
 とうでささうをさあやら「^短今頃のる合巻の後さうし「^短有
 さうさ係ご「^短遠く移入よきあん本さう京まき傳やんる三馬まんが作まおめるかんご
 「^短変助が面をすつ。さうさうらるねんのは似に面めんで重かさらうの「^短豊とよ國くに

国^{くわに}身^みふふ^ふの^のんで^{んで}変^{へん}助^{じゆ}が^が似^に面^{めん}ふ^ふ画^{かく}と^とう^うう^うら^らう^う一^一に^に殺^{ころ}され^るる
 と^と変^{へん}助^{じゆ}を^をう^うう^うむ^むの^のよ^よ後^ご本^{ほん}ふ^ふ也^やり^り芝^し居^ぐて^てあ^あり^りと^と何^{なに}も^もの
 功^{こう}徳^{とく}で^で一^一芝^し居^ぐる^るが^が替^かを^を南^{なん}北^{きた}が^が作^さる^るさ^さづ^づめ^め音^{おん}羽^う屋^やの^の父^{ちち}郡^{ぐん}
 さ^さぬ^ぬが^が後^ごと^とど^どろ^ろち^ち入^いら^らぬ^ぬも^も男^{おとこ}が^が社^{しゃ}る^るの^の一^一仕^し合^あ者^{もの}で^で一^一替^かを^を
 南^{なん}少^{せう}と^とら^らし^しの^の道^{みち}外^{がい}役^{やく}者^{もの}が^があ^あり^りも^も位^ゐ付^づが^が上^{かみ}上^{かみ}吉^{きち}各^{かく}人^{ひと}で^で
 あ^あり^りと^と一^一今^{いま}の^の六^{むつ}其^{その}家^{いえ}筋^{すぢ}が^が狂^{くる}言^{ごん}口^{くち}方^{かた}さ^さ一^一勝^{かち}儀^ぎ義^ぎの^の改^か名^な
 さ^さづ^づか^かハ^ハ儀^ぎ義^ぎを^を一^一目^めさ^さぬ^ぬが^がよ^よう^うと^と上^{かみ}さ^さぬ^ぬの^のう^う一^一き^きり^り
 の^のさ^さ一^一ト^トキ^キニ^ニ今^{いま}年^{ねん}の^の教^{しやく}を^を歩^{あゆ}の^の文^{ぶん}に^にあ^あり^り大^{だい}へ^へで^であ^あり^りこの

一^一物^{もの}ら^らテ^テい^いそ^そび^びし^して^て一^一今^{いま}の^の若^{わか}人^{ひと}と^とか^かは^はい^いと^と
 若^{わか}人^{ひと}と^とい^いふ^ふの^の役^{やく}者^{もの}を^を興^{おこ}す^すら^らん^んど^どい^いう^う一^一冬^{ふゆ}人^{ひと}上^{かみ}と^とい^いふ^ふ
 役^{やく}者^{もの}を^を今^{いま}并^{なら}倉^{くら}へ^へけ^けて^て一^一後^ごへ^へ南^{なん}附^つの^の流^{りゆう}の^の合^あ符^ふへ^へら
 坊^{ぼう}羽^う移^{うつ}へ^へい^いら^らぬ^ぬぐ^ぐり^りア^アキ^キス^スん^んど^どり^りて^て體^{たい}を^を勤^こん^んど^どふ^ふと^とる^るの^のが
 い^いり^りの^の義^ぎ風^{ふう}よ^よ今^{いま}附^つそ^そん^んさ^さり^りと^とて^てあ^あり^りと^と見^み物^{ぶつ}が^が合^あ合^あ一^一
 移^{うつ}へ^へニ^ニい^いり^りし^しの^の実^{まこと}ふ^ふね^ねと^とい^いふ^ふの^の今^{いま}の^の狂^{くる}言^{ごん}で^でら^らん
 直^{ちか}海^{かい}を^を刀^{たう}打^{うち}を^をせ^せぬ^ぬら^らり^り其^{その}外^{がわ}の^の皆^{みな}地^ぢ鉄^{てつ}と^とい^いふ^ふは^はあ^あら^らな
 ぢ^ぢ又^{また}子^こが^が七^{しち}十^{じゅう}余^{あまり}の^の父^{ちち}郡^{ぐん}で^であ^あり^りあ^あら^らぬ^ぬ十四^{じゅうし}五^ごの^の娘^{むすめ}形^{かたち}ふ^ふあ^あり^りと^と

りありらうのふき其の人の比の風で舞うこと今よ
 世の中七十余の爺が十四五の娘形なるて見物か承知
 ありあらんのおいもはる合のよい年来の紋者あらよの
 お多代らの手傳の紋者なるねが後らぬとらて合はし
 縁くのみそのう人ふ若人が器用とまておらうらうもはあて
 かあら縁人紋者よかぎらばとてのゆが若人の行りまは
 世界まア志し教まの二目りつりも雪降ぐまの業を
 の親仁が例の酒を和田なるふ築地の善公が居るのりも

かららぬ二目目の教を実を教まの縁でめつよ和田なるが
 中島国四郎と云う所なる知居るアノ高藤屋の父那松の
 よく名を更さ人ま築地の善次も宝曆年中うら久し
 兼善で愛敬のある社屋負のある紋者まはちや築地へ
 移れ移入らる通白小なる一考なるの兼其屋次
 さらざの「むがけくらの辨」さどト「おんが且那のは辨が
 移るの「善次」考なるの考なることなるのでむりし
 う子「むりし」考なるホニめでこの紋者さ「せん」

大先^{おのせん}の^い「これら誰^{たれ}もぬりのもたらん」^い「風流^{ふうりゅう}のま^い」^い
「か^い芝居^{しやう}繁昌^{はんじやう}で役者^{やくしや}の常用^{きようじゆ}あたらふこの^い當時^{たうじ}の^いの^い
ある^い人^い「むじとまても^い何^いじて^い當時^{たうじ}あ^いらふ^いの^いの^いさ」^い
又^いむじと^い万^いの^い組師^{くし}ご^いら^い社^いの^い能^いの^いさ^い今^いの^い世^いの^い中^いの^いむじ
の^いの^いを^い踏^いま^いや^いし^いて^い足^いく^いその^い上^いへ^いと^い登^いり^いて^い行^いく^いそ^いら^い人^いを
賢^いく^いあ^いら^いふ^いま^い遠^いく^い移^い入^い「ま^いう^いと^いさ^いん^いが^いあ^いら^いが^い裏^いの^い俳^い諧^い師^い乃
坊^いま^いぬ^いが^い有^いら^いけ^いあ^いれ^い知^いる^いそ^いら^い「^い今^い高^い慢^いを^い和^い尚^いご^いら^い
「^いま^いう^いら^いに^いち^いん^いん^いん^いご^いう^いり^いま^いて^い癡^いを^いお^いど^いして^いお^いら^いぶ^いめ^いり^いの^いが

大^い「^いひ^いよ^い「^いハ^いア^いど^いき^いし^いの^いの^い」^いの^いの^いけ^いも^い移^い入^い遊^い諧^いで^い芭^い蕉^いの^いま^いの^いを^い
「^いま^い行^い脚^いふ^いま^いら^いの^い「^いま^いう^いら^いが^いお^いし^いら^いる^い芭^い蕉^いの^いま^いま^いら^いの^い
「^いま^いる^い紙^い巾^いを^いか^いぶ^いて^い在^い者^いの^いや^いう^いの^い形^いを^い頭^い陀^い袋^いを^いグ^いツ^いト
首^いふ^いか^いけて^い如^い意^いと^いら^いる^い物^いを^いま^いふ^いり^いて^いま^いら^い社^いが^い「^いま^いら^い
そ^いこ^いや^いら^いの^い山^い道^いを^い野^い宿^いを^いま^いら^いる^い「^いフ^いム^い「^いその^い鏡^いの^い内^いに^い狼^いふ
食^いら^いれ^い「^いエ^い「^い狼^いふ^い食^いら^いれ^い「^いま^いら^いの^い「^いヤ^いと^いん^いご^いら^いぶ^いが^いあ^いら^い物
「^いせ^い「^いま^いら^いの^い「^いむ^いじ^いの^い芭^い蕉^いの^い名^い人^い上^いへ^いま^いで^い後^い世^いの^い名^いを^い残^いす

下
四十二

おはなまがとんまことらあわうおの松「しらゆきとてうらうらうら
 りの腕はくして云々」アアと云ふ。あゝいふ強情者
 いろいろ對面なうゆゆ「ユウ」友方一統なうらうら社なる
 松さん今此裏で巫女がほをよせ居るせ腫れんう「しらゆき
 おもて入」おれもきくべら「死なう」死なう威勢が社ナユウ
 とやゆらうしてうらうら。ちよび東ざら「其因もらア社うら
 らどらう入」ユウ」家の因で社うら「まける」そのうア奇因うら
 とゆふまきまき
 大天機をうらうらうらうら松や。てうらもうらもぞ案でこゆる

「あのちよも壽させとんまのうらうらとてうらうら
 うらうらひまのなまのうらうらうらうら「おまやうら」「ちよも
 むけりやア約束のうらうらうらうら「てめ入ゆを社うら」猪を百目
 買てゆるまきまき「此中のんもたぬを食」「まきのゆ
 うらうら「コウ生口をよせるとナかうて死と眠あるまうらうら
 「ものおまのゆ入這入今社うらうらうらうら「居は家
 うらうら「それぢやアまきまき歩むびぬらうら「社うらうら
 コウ家のゆきまきまきてめる女郎の陰とナ。家の今社うらうら

ひらへぐとて捕らう。そのしておらしてはかよまぬとぞやあねが
ちとせうろ け女郎や今附がさうしめのおとこはらう。一 松 さいりアあ
くまごかろうせく。一 松 ねも寄せてみるりのがめるはく
せう 竹 コウ乳母さんおめへも田舎ふなる亭うでもおねへ
く ちとせ 罪ごといかららりあまらう。一 松 罪よりの江戸て
男と採居るうら亭主をよせうぶさうもあうはうんが
く 松 みるゆあねのさにはととるがゆあ涙をおらして
ら 竹 へる錠をわらして腰うら下を明離ら ちとせ さい
あけなる うま

松 のんまり否でもある人サア皆がさあねく。一 松 サア
く まろ ねうせく。一 松 ようらうく。一 松 トレおれもねうらへんをと
るげねへス。一 女房 乳母さんおめへもさるナ まき 味が悪
かうご子。一 女房 ねらゆるがるみのう。一 松 コレまあへま 浅 浅
費するのをさるる。一 女房 ナニサ よせ 一 松 倚やア びん やせん へん へん
おれが居るとな いぢ 一 松 んがけおよせらう。
松 一 これ は たへん 二編目巫女口倚のほぐ ま 一 松 さいらう
サア ちとせ さいらう ま さいらう てん へん

下ノ四十六

巫女の口をよせさせしむるぐさぬぐの
おしきと赤くくうがらして成春
二咲目ふさし物一可も長その節
法評判よ為く奉希い

筆耕 石原 駒知道

柳髮新話浮世床初編卷之下終

浮世床後叙

滑稽之魁

長き物。飛頭蠻は及吐とは。
清女が竹毛めしめ物を附の通
句な理夫より毛まご長いのら不徒
三馬が安達令。一寸出た身は思
乃亦。拍屋を名約束も羽立明く

日と云延ひののびと云武ぶのふと云となり。

 乃なと云とばけり。乃なと云との西よの勢せは

 皇み霜さうを經ふるぬ。皇み霜さうふと云と風かぜ勢せ客きやく

 乃なお腹はら立たちぬつぬ。怒いらて曰いハク。

 三馬さんばれ大癡漢おほおろし。汝書なんぢが買かひやう

 乃なと云と志しと云とすや。製衣本せいゐほん、お本本の

時節ときせつあり。發販はつばんも發本はつほんの氣候きこう

 何事なにこと。汝なんぢが様やうやなぬけ。發市はつし

 たくも制衣本せいゐほんが出來きず。半吞はんどん半吐はんとの

 ぬのづらちんおお後ごでぐもも鋪かちも

 乃なと云と何なにん也なり。汝なんぢが如ごとく戲作者げさくしやと先生せんせい

 之職過このしやくがら。大人おとななぐの空拜そらあがと

早はやく書かくますひひま。尻しり食く觀くわん音おん
やご。吳わん音ぜでせ先せん生せい也や。ののとと金きん
慾りさん松しょう号ごう挿さうなり。宜ましハドッダのの冠かん辭じ
以ひ付けてご先せん生せいののふふややののめめ。彼あ
川せん柳りゅう釣てうり。先せん生せいののそそくく烟えん苦く上じやう癩らい
ささささるるくくしし屬たぐひふふ齋しやう。仍なほも

落おちぶぶののめめのの字じとと添そくく。三さん馬ばああがが小せう乞き
人ひと皆みな鄙びしし。以あ後のち汝なんぢをを後こう生せいとと呼よぶ
小せう乞きとと唱なぐぐ。作さくもも頼たのめめ。筆ふでもも疲つか。
怒ど氣き滿まん面めん。現あままそそ。欲よく心しん臍さい下か
小せう乞き。素すよよくく重ぢくく。最さい半はん句く
おお言ことももおおどどがが獲とめめ。倉くら卒そつふふ毫ごと

採^{しゅう}く^く終^{しゅう}説^{せつ}おけ^お少^{せう}冊^{さつ}以^いの^のと^とも^も柄^{がら}
 の^の人^{ひと}柱^{はしら}人^{ひと}は^は懸^かる^る教^{きょう}讀^{どく}本^{ほん}と^と出^でし
 於^お神^{かみ}々^々多^た謀^{ぼう}証^{しやう}文^{ぶん}仍^{なほ}々^々如^{ごと}件^{けん}と
 江戸^{えど}前^{まへ}北^{きた}市^し隱^{いん}



式^{しき}亭^{てい}三^{さん}馬^ば醉^{すい}中^{ちゆう}誌^し



尔^{なん}云^ん

三^{さん}馬^ば醉^{すい}中^{ちゆう}誌^し
 名^な多^た々^々

雲^{うん}湖^こ評^{へう}云^ん營^{えい}故^こ切^{せつ}乎^や



